

琉球からのヒイラギ属の1新種と1新変種

山崎 敬

東京大学理学部附属植物園 112 東京都文京区白山3-7-1

Two New Taxa of *Osmanthus* from the Ryukyus

Takasi YAMAZAKI

Botanical Gardens, Faculty of Science, University of Tokyo

3-7-1 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112 JAPAN

(Received on February 14, 1994)

A new species of *Osmanthus*, *O. iriomotensis* Yamazaki, and a new variety of *O. insularis* Koidz., var. *okinawensis* Yamazaki, are reported from the Ryukyus.

初島氏の琉球植物にはヒイラギ属 *Osmanthus* が5種類記録されている。このうちナタオレノキ *O. insularis* Koidz. とリュウキュウモクセイ *O. marginatus* (Champ.) Hemsl. は問題ないが、他の3種類は正確に認識されているとは言えず問題がある。ヤナギバモクセイ *O. okinawensis* Hatusima は主に沖縄本島の東北部の低地に見られる。現地では色々な個体を調べたところでは、比較的乾燥した低木林内に生えるもので、葉は細いけれど花や果実はナタオレノキと差異がなく、種類として区別するのは困難である。葉の細いものは他所でもみられるが、葉が厚くて、裏面の側脈は葉肉内に埋まっていて、外に浮き出されないという特徴を持つものはここにしかなく、変種程度の扱いで区別するのが妥当であろう。問題なのはヒイラギ *O. heterophyllus* (G. Don) P. S. Green とナンゴクモクセイ *O. enervius* Masamune et Mori である。これを明らかにするには、両者が琉球に分布するとされた経緯を述べておく必要がある。

ナンゴクモクセイは森邦彦氏が自身で採集した台湾(台中州東勢郡達見)の標本を Type として新種 *O. enervius* を記載した際に、同じ種類のものとして正宗巖敬氏が1934年に琉球西表島で採集

した標本を引用したことに依る。台湾のナンゴクモクセイは葉が披針形で尖っているのが、正宗氏の標本もそのような形であったものと思われる。これがナンゴクモクセイが琉球にあるとされる唯一の記録である。

ヒイラギは初島住彦氏が1955年に西表島の御座(ゴザ)岳で採集したものをヒイラギと同定して初島、天野、沖縄植物目録、初版(1958)に載せたのが最初だと思う。この標本は花も実もないものであった。1963年12月に私も御座岳の頂上近くでこれを採集した。丁度花の満開の時期で琉球の帰りに鹿児島大学で初島氏に標本の一部を提供して、ヒイラギと確認していただいた。その後琉球の他所でヒイラギを見つけたという記録はないようだから、これが唯一の確実な記録である。

1976年に西表島の古見岳に登った際、頂上付近で葉が小さく披針形で先の尖ったモクセイ属のものを見つけた。小さな木で花も実もなかったが、琉球で見たことのない種類であった。そのままになっていけれど、日本の合弁花類を纏めるにあたって、処理することが必要となった。古見岳は登山に困難な山でそう簡単に行ける所ではないが、琉球大学の標本を調べたところ、標本は総て花も

実もなかったけれど、古見岳で見たのと同じものが御座岳にもあることがわかった。1990年10月に御座岳に登って調べてみた。目的のモクセイは頂上付近のゴザダケザサの藪の中に十数本存在するのが認められた。ナタオレノキは低地にかぎられ、リュウキュウモクセイは標高200m程から上には見られないから、400mの山頂部のゴザダケザサの中にのみ見られるこの種類は、明らかに下のものとは別の種類である。私が花を採集してモクセイと同定された木も健在であった。27年たつのにちっとも大きくなっていないし、当時道の下から見上げたのでかなり大きい木に思えたが、3mほどの灌木であることがわかった。十数本の木には花も実もなく、花を見るには12月の末まで待たねばならないのであろう。ここで判明したのは、古見岳で見た披針形の先の尖った葉をもつものは幼木の葉であって、成木になると総べて葉が丸い楕円形になることである (Fig. 1)。幼木の葉は披針

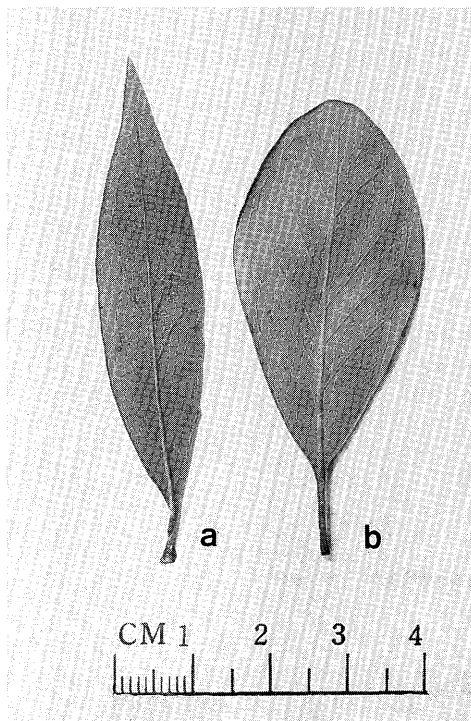


Fig. 1. Leaves of *Osmanthus iriomotensis* Yamazaki. a, from a young tree b, from an adult tree.

形で全縁のものだけでなく、ヒイラギよりさらに細かく鋭く尖る刺を縁にもつものもあった。正宗氏が西表島で採集しナンゴクモクセイと同定されたものは、このモクセイの幼木のものであろうと考えられる。ナンゴクモクセイの成木の葉とよく似ている。御座岳は自動車道路ができる以前は白浜と大富を結ぶ重要な道路だったから、正宗氏の標本も御座岳で採集されたものと推定される。琉球でナンゴクモクセイとヒイラギと呼ばれているものは同じものである。ヒイラギと比較すると幼木や成木の葉の形が異なり、葉はやや薄くておとなしい感じで、ヒイラギのような固さがないし、木が2-3mにしかならない灌木であることなど、本州のヒイラギとはかなり異なる感じを受ける。

琉球のヒイラギは本州のものとは異なるのでこれをヤエヤマヒイラギと呼ぶことにする。1990年に採集したヤエヤマヒイラギの挿し木は、沖縄と小石川植物園で活着し、1993年暮れに花を付けた。小石川植物園での花はすでに終わってしまっただけで知らなかったので見ることはできなかったが、沖縄の沢岷安喜氏が花を送ってくださったので調べることができた。ヤエヤマヒイラギは幼木の葉は披針形で先が尖り、成木では楕円形か倒卵状楕円形で、先は丸く、裏面の側脈は殆ど目立たない。裏面に多数の腺状の細点があるが、これはヒイラギ属のなかりの種類に見られるものであるから、重要な特徴とは言えない。花弁は長さ3mmならずで、ヒイラギより小さい。ヒイラギの葉はツカミヒイラギのように先が丸いものもあるが、野生のものは成木の葉でも刺状に尖り、裏面の側脈は浮き出し、花弁の長さは約4mmである。ヤエヤマヒイラギはヒイラギとは明らかに異なる。台湾のナンゴクモクセイは成木の葉は披針形で尖り、裏面の腺状細点はごく少ない。花の大きさは殆ど同じであるが、花梗が長さ2-3mmでヤエヤマヒイラギの5-6mmに比べるとずっと短い。また包葉の縁に細毛があるが、ヤエヤマヒイラギは無毛である。花梗の長さは雄木と雌木とで異なることもあるから、今後の調査を必要とするが、ヤエヤマヒイラギとナンゴクモクセイとは別種として扱うべきであろう。独立の種類としても外形からはヒイラギに縁の近いものと考えられる。

この調査に協力して下さった沢岷安喜氏に感謝します。

***Osmanthus iriomotensis* Yamazaki, sp. nov.**

[Figs. 1 – 2]

Osmanthus enervius Masam. et Mori in Journ. Jap. Bot. 15: 548 (1939), p. p. quoad specimen a Ryukyu lectum.

Osmanthus heterophyllus auct. non G. Don: Hatusima, Fl Ryukyu: 482 (1971); Walker, Fl. Okinawa and S. Ryukyu Isls.: 837 (1976).

Suffrutices 2–3 m alti. Ramuli tereti, glabri, cinerascenti. Folia coriacea, petiolis 3–4 mm longis, glabris, laminis ellipticis velobovato-ellipticis, 2.5–5 cm longis, 1–2.5 cm latis, apice rotundatis vel obtusis, basi acutis, leviter attenuatis (in juvenibus lanceolatis, apice acuminatis), integris, superne glabris, subtus dense glanduloso-punctatis, costa superne leviter impressa, subtus tenuiter elevata, nervis lateralibus utrinque obsoletis. Flores 4–8, ad axillas foliorum superiorum fasciculati, basi bractati, Bractae involucretae 2,



Fig. 2. *Osmanthus iriomotensis* Yamazaki. Photo by A. Takushi, Jan. 23, 1994.

coriaceae, persistentes, ovatae, acutae, ca. 1mm longae, basi connatae. Bractae 4, decussativae, scariosae, ovatae, acutae, ca. 1mm longae, caducae. Pedicelli 5 – 6 mm longi, glabri. Calyx late campanulatus, ca. 1 mm longus, 1.5 mm latus, 4-lobatus, lobis ovatis, acutis, glabris. Corolla alba, campanulata, ca. 3 mm longa, profunde 4-lobata, tubo ca. 1mm longo, lobis obovatis rotundatis, ca. 2 mm longis. Stamina 2, ca. 2 mm longa, filamentis ca. 1 mm longis, glabris, antheris luteis, oblongis, ca. 1 mm longis. Stylus ca. 2 mm longus, capitato-stigmatosus. Ovarium, ovoideum glabrum. Fructus ingotus.

Hab. Ryukyu. Yaeyama, Isl. Iriomote, Gozadake, 400m, in *Sasa* thicket (T. Yamazaki, Dec. 26, 1963, no. 2646, Typus TI, fl.). Ibid. (S. Hatusima, Jul. 16, 1955, no. 18739 sterile; T. Yamazaki, Oct. 15, 1990, no. 6467, sterile. Ibid. cult. in Okinawa; Takushi, Jan. 12, 1993, fl.; A. Takushi, Jan. 23, 1994, fl.). Mt. Komi, 450m, in *Sasa* thicket (T. Yamazaki, Jun. 17,

1976, no. 336, sterile).

This new species differs from *Osmanthus heterophyllus* (G. Don) S. P. Green by the softly coriaceous leaves with round apex, inconspicuous lateral nerves on lower surface, and the smaller corolla; from *O. enervius* Masamune et Mori by the elliptic or obovate-elliptic leaves with round apex, more densely glandular-punctate on lower surface, the longer pedicels and the glabrous involucre bracts.

***Osmanthus insularis* Koidz. var. *okinawensis* Yamazaki, var. nov.**

Osmanthus okinawensis Hatusima, Fl. Ryukyus: 483 (1971), nom. seminud.

Folia anguste-lanceolata, 6 – 9cm longa, 1 – 2.5cm lata, subtus enervia.

Hab. Ryukyu. Isl. Okinawa; Kushimagiri (A. Tashiro, March 1887), Higashison, alt. 100m in scrubs (T. Yamazaki, Oct. 12, 1990, no. 6426 Typus TI, no. 6489, fl.).